平成３０年度秋季企画展

芦原温泉 ものがたり
～明治に生まれた名湯の軌跡～

１．はじめに

芦原温泉は明治時代に開湯（かいとう）した、歴史が新しく、しかも、秘湯と呼ばれるような山中でも海岸近くの風光（ふうこう）明媚（めいび）な場所でもなく、平野の中に突如として現れた非常に特異な温泉地です。しかしながら、明治時代の機運と福井県内で発見された数少ない温泉地ということもあり、何もなかった田野には開湯から１年で１００戸もの旅館や人家が立ち並ぶ市街地が出現しました。温泉地としては必ずしも場所に恵まれていたわけではなかったのですが、紆余曲折（うよきょくせつ）経ながら発展し、やがて「関西の奥座敷」と呼ばれ県内外から大勢の観光客が集まるところとなりました。

このような芦原温泉の発展には様々な業種が協力し、それぞれの物語をつむいでいます。本展では芦原温泉の歴史とともにそれらの物語を紹介していきます。

２．開　　湯

芦原温泉は「旧暦の明治16年９月９日（新暦の10月９日）に堀江十楽の字一番に井戸を掘ったところ、湯が涌き出た」とされるのが最初です。これは『福井県芦原温泉誌』（島崎圭一著、昭和７年、以後「50年誌」と記載）に記載されているもので、その後の70年誌、100年史にも引用され、ほぼ定説のようになっています。ただ、これは公的な記録によるものではなく、開湯から50年たった時期の聞きとりにより記載されていたものです。そのため、いくつか疑問点があります。例えば「お湯が出て大評判」になったとありますが、当時の新聞にはその記載がなく、更に他の地区が温泉を掘り出したのも年が明けてからの事（田中々（たなかなか）・明治17年３月25日、舟津（ふなつ）・同４月１日、二面（ふたおもて）・同４月２日）でした。冬を挟んでいたとはいえ、９月から５ヶ月以上もたってから周りが動き出したのはなぜでしょうか？

図１　現在の芦原温泉発祥の地

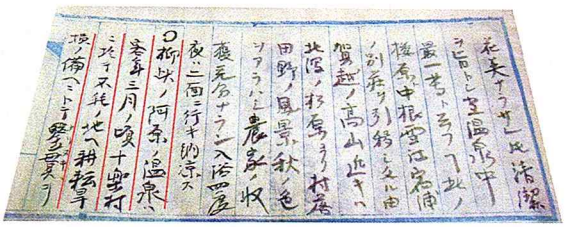


図２　芦原（阿原）の来歴が記されている記録
（『岡田彦三郎公用日記』、明治18年、個人蔵）

今回、本展開催にあたり様々なところへ聞きとりに行きました。その中の１ヶ所に開湯期から旅館をしていた（現在は廃業）お宅があり、そこに伝わるおもしろい話を伺いました。内容は「あそこの井戸は、元々飲料水を確保するために掘っていたのに出てきたのはお湯、しかも塩分が含まれていたので大変がっかりしてしばらく放置されていた。」というものでした。50年誌とは真逆のお話です。その続きは「寒くなってからお湯が出たことを思い出し、お風呂に使ってみたところ大変よかったので評判になった。」というお話で、ここは50年誌と似ています。最初の部分は温泉開湯に「がっかり」では後々の評判に都合が悪いので削除されたのでは・・・。

しかしながら、このお話も「伝承」で記録というわけではありません。お湯が出たことを「喜んだ」のか「がっかりした」のか、今の私たちには知るすべはありませんが、実は、開湯時期そのものが違っていたらどうでしょうか？

ここに注目の資料があります。図２は梅浦村（現越前町梅浦）外四ヶ村戸長だった岡田彦三郎が明治18年8月26日から12日間にわたり芦原温泉へ湯治に出かけた記録です（以後「岡田彦三郎日記」とする）。これの8月27日に「柳此ノ阿原ノ温泉ハ客年三月ノ頃、十楽村ニ於テ不耗ノ地ヘ耕耘旱損ノ備ヘニトテ鑿貫ヲ試シタルニ、図サル温泉湧キ出塩苦味アリ（後略）」と芦原温泉の来歴が記されています。「客年」とは「昨年」の意味なので、昨年３月、つまり明治17年３月に旱損（かんそん）の備えに井戸を掘ったところ温泉が湧出したと記されています。また、福井新聞・明治17年３月13日の記事に「又曰く、聞くところに拠れば当郡（坂井郡）里十楽村にこの頃混々として温泉を沸出する由、彌左様なれば至極結構」とあり、３月に温泉が湧出したと記しています。

この二つの資料からすると、当時の人々が明治17年３月に温泉が湧出たことを認識しているのがわかります。ではなぜ50年誌では明治16年９月９日（旧暦）としたのでしょうか？まず井戸そのものを掘ったのは明治16年であることが明治17年４月３日の福井新聞の記事より伺えます。そして岡田彦三郎日記に「耕耘旱損ノ備ヘニトテ」とあるように、「水」を求めて掘った井戸から「塩味のするぬるい湯」が出たので、伝承のように放置されていて、翌年になってから温泉として認識されたのかもしれません。推測の域を出ませんが伝承と記録を合わせると定説とは違った開湯の風景が見えてきそうです。

2．地　　名

芦原温泉は平野にある全国的にも珍しい温泉場です。舟津、田中々、二面の３地区から成り立ち、開湯当初は「舟津温泉場」「田中々温泉場」「二面温泉場」というように各地区名の温泉場名でした。（図３参照）これがなぜ芦原温泉と呼ばれるようになったのでしょうか？

これは、『開湯芦原温泉100年史』にあるように、舟津温泉が湧出した場所の「字阿原」や、二面温泉が湧出した場所の「字荒原」（図５参照）がいずれも「あはら」と読んだことが由来だと考えられます。

また、先の岡田彦三郎日記にも「此地三ヶ村ニ距ルト雖ドモナベテ阿原ト云フ」と記載があり、既に明治18年の時点で三温泉全体を「阿原」と呼んでおり、ここから「芦原温泉」と呼ばれるようになったと考えられます。

図３　現存最古の引札（広告）
「越前坂井郡舟津温泉場」とある
（明治20年、福井県立歴史博物館蔵）

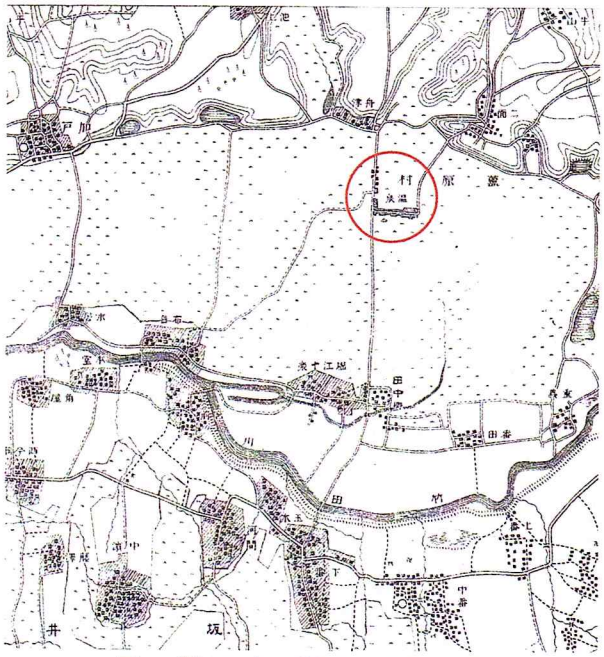


図４　明治32年の芦原温泉周辺の地図
（国土地理院発行　２万分の１地形図（三国町）を使用）
※○が当時の温泉街

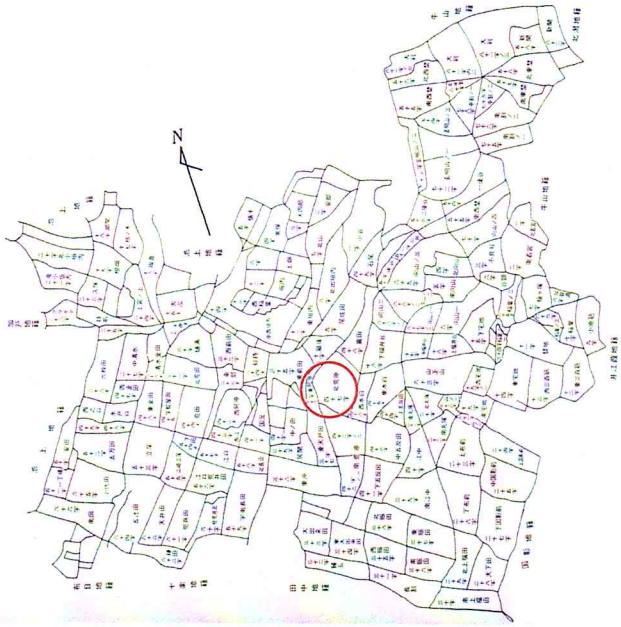


図５　温泉湧出ごろの字名
（『開湯芦原温泉100年史』より転載）
※○が温泉街の中心地となった所

3．発展と旅館

	温泉区			
	世帯数	男	女	人口計
大正九年	三〇五	五六〇	八二八	一、三八八
〃一四	三六二	七〇〇	九七〇	一、六七〇
昭和五	四一〇	八〇七	一、一八七	一、九九四
〃九	四一九	八三一	一、二四二	二、〇七三
〃二五	六七六	一、二六七	一、七四一	三、〇〇八
〃三〇	七五七	一、三二二	一、九七二	三、二九四
〃三五	九二四	一、四四九	二、一二八	三、五七七
〃四〇	一、一四三	一、五五四	二、三〇五	三、八五九
〃四五	一、一一七	一、五四九	二、九五二	四、五〇一

図6　芦原温泉の人口推移
（『芦原町史』より転載）

それぞれの地区では山中・山代温泉を手本として市街計画がなされ、各地区に総湯が作られました。また建設時には開湯式が行なわれています。そして各総湯を中心に市街地が形成され、発展していきました。岡田彦三郎日記には、「このころには既に100戸ほどの家がある」との記述があります。元々人家がなかった田野に温泉が見つかり、1年弱で100戸もの建物が作られたのは驚くべき速さです（しかしながら、この急速な建設で「芦原普請」という言葉も生まれ、「粗雑な建物」の代名詞になったともいわれています）。

中には投機目的で土地を買いあさろうとした人もいたらしく、福井新聞に堀江十楽の千三百坪を500円（明治時代の1円は2万～3万ぐらいと考えると1000万～1500万）で買った人の記事が出ています。

開湯当初、各温泉場には応援してくれる地区があり、舟津温泉場は三国、田中々温泉場は丸岡、二面温泉場は金津の人々が贔屓（ひいき）にしていたそうです。

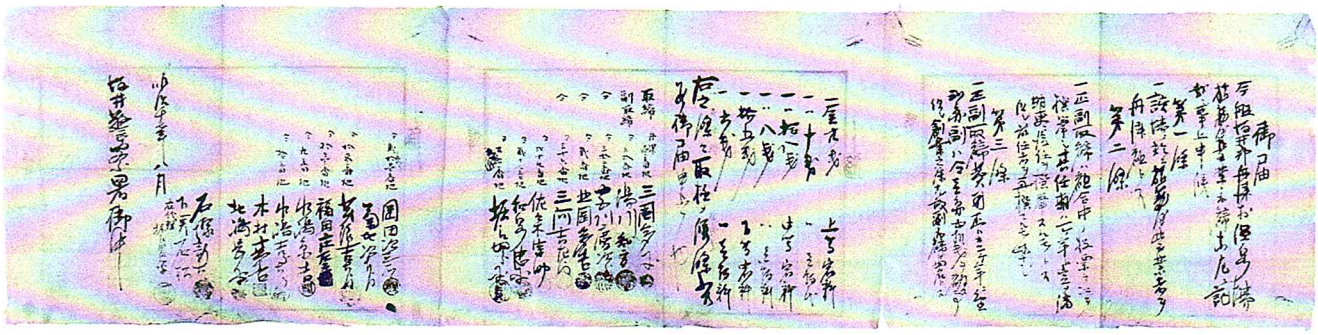


図7　旅館組合の設置届（明治17年）
（原本：個人蔵、画像提供：久野印刷㈱）

図7は明治17年8月に舟津村から提出されたもので、今の旅館組合の前身になるものを結成するための届出です。本展ではこの原本が初めて公開されています。

芦原温泉は、元々人が住んでもいないところに新しくできた温泉場だったので、諸事不便なことがありましたが、みんなで協力して乗越えていこうとする意識の表れでした。そのような意識は昭和の前半までおよんでいました。事実、旅館同士の付合いも濃厚だったようで、図8のように旅館の跡取りたちで構成された青年部の集まりも活発に行われ、温泉街を盛り上げるための劇なども行われていました。また、旅館同士で共同仕入れなどをしてお互い助け合ったそうです。

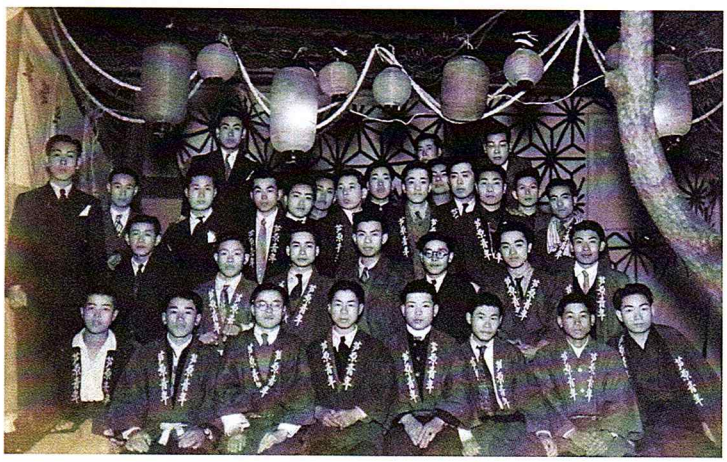


図8　旅館組合の青年部の集まり（昭和時代前期）
（画像提供：個人）

そのような意識は旅館内部にもありました。昔は旅館の中で宿主のことを「お椀さん」と呼んだそうです。これは、旅館料理につきものの「椀物」に旅館を例えた言葉で、宿主は全体を支える「お椀」、従業員は引き立て役の「出汁」、お客様は主役の「具材」、女将はすべてを包み込む「蓋」とされていました。旅館をみんなで支える意識が表れている素敵な例えだと思いませんか。

4．土 産 物

旅行の思い出にはお土産がつきものなのは今も昔も変わらないものです。50年誌には名物・名産として「芦原焼、竹細工、温泉染、菓子にラヂウム豆板、湯の花煎餅、羊羹、あはら饅頭、あはら餅、あはらよもや、松の露等」とあります。既になくなったものもありますが、芦原温泉を彩ってきた代表的なお土産を紹介します。

染付け辰砂花器（三代久世天聲作）

芦原焼

芦原焼は大聖寺の久世清（号天聲（てんせい））が芦原温泉に良い土産物がなかったことから大正3年に創業しました。代々の当主は天聲を名乗り、お土産物に留まらず、美術的にも評価の高い作品を作り上げていきました。

松之露（浅野耕月堂）

松之露

松之露を製造している浅野耕月堂は芦原温泉が開湯してから最初にお菓子屋（販売）をはじめた芦原温泉で一番の老舗です。後に販売だけでなく製造もはじめ、明治32年に松之露を発売以来、変わらぬ製法で作り続けており、昭和天皇にもお買い上げいただきました。

湯の花煎餅（なべや）

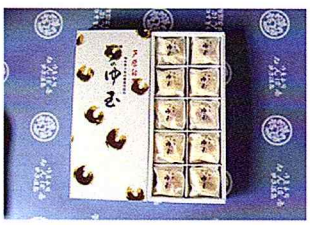
湯の花煎餅

なべやは石川県珠洲市の出身で、金沢で菓子職人としての修行を積んだ後、芦原温泉内のお菓子屋の職人として働き始めました。後に独立し、湯の花煎餅をはじめとしてあわらよもやなども製造していました。湿気の高い温泉街で硬いお土産を提供するため、缶に入れて販売しました。

どんりん（だるまや）

どんりん

だるまやは敦賀のお菓子屋が芦原温泉の盛況を見て、お店を移しました。50年誌に出ている「ラジウム豆板、あはら饅頭、あはら餅」などは、だるまやで販売していて、あはら饅頭やあはら餅は名前を変えて今でも販売しています。今のお店の名物はどんりんでフルーツカステラと粒あんを最中で包んだ手作り菓子です。



芦のゆ玉（なんば屋）

芦のゆ玉

なんば屋は昭和26年に舟津温泉で創業し、昭和54年に現店主があとを継いだときに、今の場所に移転しました。芦のゆ玉は、昔芦の間から湧出する温泉の湯気が、さながら玉のように見えたことから、人々はそれを「ゆ玉」と呼び、それをお菓子で表現した銘菓です。

正誤表　4ページ
松之露→松乃露

あわら市郷土歴史資料館

平成30年度秋季企画展　「芦原温泉ものがたり～明治に生まれた名湯の軌跡～」
会　　期：9月22日（土）～11月25日（日）
開館時間：9：30～18：00（最終入館は17：30）
休 館 日：毎週月曜日、第四木曜日（その日が祝日の場合はその翌日）
お問合せ：電話・0776-73-5158　e-mail・maibun@city.awara.lg.jp